二〇二四年度 自己推薦入試 試験問題

人間総合学部 児童文化学科

小論文

注意事項

一. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないこと。
二. 試験開始の合図があったら、解答用紙の所定の欄に受験番号と氏名を記入してから問題にとりかかること。
三. 解答はすべて解答用紙の所定の欄に記入すること。
四. 試験時間は、九時三〇分から十時三〇分までである。
五. 試験終了後、答案を回収する。問題冊子は持ち帰ること。

白百合女子大学

次の文章を要約し、それに対するあなたの考えを述べなさい。（八〇〇字以内）

人間と魔女が結婚をして、生まれた子どもが女の子のばあいは、たいてい魔女として生きていくのがふつうでした。でもたまにはいやがる子もいるので、十歳をすぎたころ、自分で決めてよいことになっていました。もし魔女になると決心がつけば、ただちにおかあさんから魔法をおしえてもらって、十三歳の年の満月の夜をえらんで、ひとり立ちをすることになります。この魔女のひとり立ちというのは、自分の家をはなれ、魔女のいない町や村をさがして、たったひとりで暮らしはじめることです。

（P．8）※角野栄子『魔女の宅急便』（福音館書店、一九八五年）の二〇一八年発行の第八十四刷より引用。

魔女の旅立ちがどのようなものかについて、おおよその説明をしたのがここに引用した部分である。

物語の主人公、キキはこの時十三歳で、魔女になるかならないかの決定をすでに三年前にしている。

ともあれ、ここで少しのあいだ立ち止まって、魔女というものについて考えてみよう。

日本語の〈魔女〉はそもそも〈女〉という字が入っているから、女性であることがすぐにわかる。魔女に相当する英語は witch あるいは hex である。英語の名詞は性を持たないので、witch にしても hex にしても、それが女性であることを暗示していない。英語には、sorcerer の女性形の sorceress という語もあるが、これはどちらかというと〈魔法使い〉というニュアンスがあり、魔女とはずれがある。

ドイツ語になると、魔女は Hexe（ヘクセ）であり、女性名詞だから、女性であ

ることを暗示している。このHexeという語の古い形はhagazussaということになっており、これは元来〈垣根の女〉という意味だ。垣根とは境界のひとつであり、したがって、〈垣根の女〉は〈境界にいる女〉であり、〈境界をこえる女〉ということになる。

『魔女の宅急便』の〈魔女〉とは、何よりもまず〈境界をこえる女〉なのだ。すでに、『魔女の宅急便』の〈魔女〉は、人々に害を与えるという古いタイプの魔女ではない。古くからの魔女の特性として、ほうきにまたがって飛行したり、黒猫をつれていたりはするが、自分の能力を使って、害をもたらすことはない。じっさい、キキの母親コキリができることは、飛行を別にすれば、薬草を育てて、くしゃみの薬を作ることだけだ。だれかに呪いをかけるなど、したくもないだろうし、したくてもできない。

さてキキだが、キキは十歳の中頃、魔女になる決心をし、母親から飛行と薬作りを習うが、薬作りのほうはあまり性に合わないようだ。しかし、飛行のほうはすぐに上達する。そして、この飛行、ほうきにまたがって空を飛ぶことこそ、キキの最大の特徴であり、垣根のこちらにいる一般の人々にはできないことなのだ。

キキは飛行と薬作りを習って、自分の家を離れ、魔女のいない町や村をさがして、たったひとりで暮らしはじめる道を選択する。そして、物語が始まる。

物語の主人公の旅立ちには、ふたとおりのパターンがある。出発が自分の意志によるか、そうでないかの二種だ。キキの場合は前者であり、しかも、自分の道を選んでから出発まで三年の訓練期間があり、いわば、自分の決定をみずからが覚悟する時間があった。それは、とりもなおさず、自分の決定に責任を負わざるをえない状況だということなのだ。そして、そのことこそが、まさに現代的なのである。

職業の世襲は明治で終わったというのは部分的には正しいが、現実にはそう

ではない。昭和二十年の終戦までは、親の職業を継ぐのはふつうのことであり、継がないのはむしろ親不孝だと思われた。わずか、七十年ほど前までは、自分の将来は自分で決められない、それが言い過ぎならば、自分ひとりでは決めにくい状況だったのだ。しかし、現在はそうではない。少なくとも、たてまえ上はそうではない。自分の将来は自分で決めてよく、むしろ、そのほうがよいし、人間は努力すればなんにでもなれる……、というのが現代のたてまえだ。

しかし、親の職業を継ぐのがふつうのことであると考えるのは、個人の意志を軽んじているとしても、それはそれで楽な面もあったはずだ。むしろ、自分の将来は自分で決めてよく、人間は努力すればなんにでもなれるという現代のたてまえのほうが、少年少女にとって過酷だとも言える。

自分の将来は自分で決めていいとしても、そこにはどうしても両親や保護者の意図や、それによる利益誘導が働いているだろう。そして、努力すればなんにでもなれるというのは、やはり幻想なのだ。この幻想は、換言すれば、〈おまえがなりたかったものになれなかったのは、おまえのせいだ。おまえが努力しなかったからだ〉ということだ。たとえば、大学の野球部に属していて、プロ野球の選手になりたかったがなれなかった人々がひとり残らず、プロ野球選手になれたすべての人たちより努力していなかったとは、とうてい思えない。

そこには、生まれついての才能というファクターが厳として存在するのだ。また、自分の意志では毎日の自分の行動を決定できなかった幼少年期の過ごし方というファクターもある。

さて、キキの場合はどうだろう。

魔女になるためには、ふつうの人間の父親と魔女の母親のあいだに生まれる必要がある。これは、裏を返せば、キキは魔女になる才能を持って生まれてきたとも言えるのだ。しかも、練習し、飛行もできた。

キキは、魔女たる才能を持ち、しかも、魔女となって旅立つという道を自分で

選んだ。この文字どおり、のっぴきならない、退き引くことができない状況でキキは出発する。

どんな言い訳も通用しない。しくじれば自分が悪いという状況がそこにはある。

才能ということを別にすれば、これは、現代の子どもたち、とりわけ高学歴高収入の家庭の子どもたちにもあてはまることだ。

塾にも行かせた、家庭教師もつけてやった、教育資金は十分にある。おまえが高級官僚や一流企業のエリートサラリーマンや、医師や弁護士にならないとすれば、それはおまえの努力不足でなれなかったのであり、すべてはおまえの責任だ、という立場にある少年少女は、たぶん、キキに共感せずにはいられないだろう。また、それほど裕福な家庭の子でなくても、努力すればなんにでもなれるという幻想の中で育っていれば、やはりそれは同様である。

もちろん、そういうことを言いたくて、作家がそういう立場の子としてキキを描いたなどとは、私は言っていない。作家がどういう気持ちで書いたかなどということは、そもそも問題にしていない。作家がどういう趣旨で書こうが、ここに描かれているのは、自分の道は自分で選べるし、選ばなければならないということの厳しさなのだ。作家の意図はともあれ、そこには作家の現実を見つめる冷徹な目がある。分類から言えば、『魔女の宅急便』はファンタジーのジャンルに入るだろう。作家が描いたのはファンタジー世界だということに異論を唱える者はいないと思う。しかし、そのファンタジー世界を説得力あるものにしているのは、そこに現実世界の現実、リアリティがあるからだ。

『魔女の宅急便』は遠くなるどころか、発行当時よりもさらに読者の身近になっているのはなぜか？　まず、その最初の答えはこうだ。

『魔女の宅急便』はファンタジーではあるが、それはただの、目が覚めたら夢でした式の夢物語ではなく、少年少女の読者を取りまく現実が冷徹な目で観察

されているからだ。しかも、その現実は、書かれた当時より、いっそう厳しくなっているとも言えるから、キキの出発は多くの今、少年少女期にいる読者の共感を得るのだ。

結果としてキキは母と同じ魔女の道を選んだとしても、それは、ただの単純な世襲ではなく、キキの自由意志によるものなのだ。

（斉藤洋『生きつづけるキキ―ひとつの『魔女の宅急便』論―』、講談社、二〇二〇年より）